

◎ 収蔵品展「やきもの入門—多治見の古代中世編—」

多治見市文化財保護センター 学芸員 篠 昌志

多治見市は古くからやきものの産地として知られています。8世紀の須恵器生産に始まり、灰釉陶器や山茶碗の生産など、古代から現代に至るまでやきものの生産を続けてきました。多治見市をやきものの町ならしめた大きな要因には、花崗岩層が風化して堆積した豊富な陶土があったことがあげられます。また、絵の具の原料である鬼板が産出されたことも重要な要因でした。市の中心を流れる土岐川やその支流沿いには、そういった陶土などの原料が埋蔵されており、その周辺に多くの窯が築かれました。市内の窯跡は、現在までに確認されただけでも約700基におよんでいます。

本企画展ではこのような窯跡から発掘した出土遺物を中心に、多治見市文化財保護センターに収蔵されているやきものの中で、古代から中世までの資料を展示しています。

1. 須恵器

須恵器は、5世紀の初めに朝鮮半島から日本へ技術が伝わったことにより生産がはじまった、釉薬のかかっていない薄くて硬い灰色のやきものです。器種には坏や高坏、碗、皿、鉢などがあり、当初は古墳の副葬品や祭祀具として使用され、その用途は限定されていましたが、奈良時代にかけて次第に日常生活の器として使用されるようになりました。日本における生産は大阪南部で開始され、次第に全国へと広がっていきます。東海地方では、5世紀前半に尾張の猿投窯で生産が開始され、5世紀末に周辺地域へと須恵器づくりが拡大していきました。美濃地方では6世紀後半頃から生産が開始され、東濃地方では7世紀に生産が始まります。多治見市は猿投窯産須恵器などの消費地でありましたが、8世紀には須恵器を生産するようになりました。

北丘古窯跡群は華立山地の東麓に分布する古代から中世に至る古窯跡群の一つで、8世紀後半から9世紀初頭まで須恵器が生産されていました。これらの窯では、大規模な生産はおこなわれず、地域の需要に最低限対応する程度の小規模生産であったと考えられています。



北丘 35 号窯出土須恵器 碗

・他産地の須恵器

多治見市内の古墳から出土した須恵器は、この地域でやきものが生産される前のもので、7世紀以前につくられました。その多くは愛知県の猿投窯産ですが、元三ヶ根7号古墳(明和町)では猿投窯産とは異なり、畿内の系譜をひく美濃須衛窯産のものと考えられる須恵器も出土しています。多治見市で生産が開始される以前の須恵器の流入について知ることができます。

2. 灰釉陶器

灰釉陶器は、植物の灰を原料とした釉薬が初めて施された奈良時代末から平安時代後期のやきものです。須恵器より高火度で焼成することによって焼き締まり、実用性に富んだ質の良いやきものになっています。器種には碗や皿、鉢、瓶、壺などがあり、当初は仏具類や金属類の代用品としてつくられました。平安時代には、青磁や白磁などの中国でつくられたやきものを模倣したものがつくられ、主に上流階層で用いられていました。10世紀代になると一般庶民にまで使用が広がり、碗皿は食器として、鉢や壺、瓶類は貯蓄用の容器、厨房用の容器として使用されました。



北丘 14 号窯出土灰釉陶器 碗

多治見市域では9世紀後半に生産が開始され、北丘8号窯や虎溪山1号窯など、窯跡が土岐川以北に多く点在しています。この地域は燃料や原料の土が豊富であること、また、東山道を通じて消費地である信濃(長野県)や上野(群馬県)などの関東地域に近いことなどから灰釉陶器が量産されるようになり、東日本を中心として日本各地に流通するなど、一大産地となりました。

・虎溪山1号窯

虎溪山1号窯は10世紀後半に操業した灰釉陶器の窯で、南東向きの斜面に築かれた全長6.8mの^{あな}窖窯です。多治見で初めて発掘された分炎柱のない構造の窯で、窯の前の物原には小石が敷きならべてあり、湿気を防ぐよう配慮されたと考えられます。物原から出土した遺物は約5,000点で、碗、皿類の他、広口瓶や四耳壺、土錘、耳皿、托などがあります。虎溪山1号窯の遺物は、灰釉陶器の美濃窯編年の虎溪山1号様式として10世紀後半の指標となっています。



虎溪山1号窯出土灰釉陶器

3. 山茶碗

山茶碗は灰釉陶器の流れを汲んだ釉薬をかけないやきもので、東海地方一円で生産されました。この地域では11世紀後半から15世紀頃まで生産されています。窖窯と呼ばれる丘陵の傾斜地に築かれた地下式あるいは半地下式の窯で焼かれました。

器種は碗や小皿が中心ですが、少数ながら壺や鉢なども焼かれました。唐物の輸入が増えたことによって需要が減った灰釉陶器に代わって、無釉にすることによって大量生産が可能となり、主に武士や庶民を対象にしたやきもの作りに移行していきました。碗は窯の中で10枚程度重ねて焼成しており、重ねた部分には靱殻を入れて製品が溶着しない工夫がされています。

多治見市内には確認されているものだけで400近い窯跡がありますが、中でも小名田小滝9号窯からは「文永三年」(1266年)の銘がへらで描かれた山茶碗が見つかっており、山茶碗の編年を知る上で貴重な資料となっています。



小名田小滝9号窯出土
「文永三年」銘 山茶碗

・明和1号窯



明和1号窯出土山茶碗 碗小皿

明和1号窯は明和町にある鎌倉時代後期に操業した山茶碗の窯です。全長8.8m、焼成室の最大幅2.2mの窖窯で、付属施設として作業場も確認されています。また山側にはかまども残っていました。製品は碗・皿・壺・鉢・陶丸のほか窯道具の焼台など数万点が出土しました。明和1号古窯は13世紀後半の山茶碗窯の編年の基準となった窯で、学術上貴重であるとして埋め戻し保存され、平成10年3月24日に多治見市史跡に指定されました。

・少数器種

碗や皿のほかにも四耳壺や水注など注文受注品とみられる器種も生産されており、施釉されたものもあることから、施釉陶器と山茶碗が併焼されていたことがわかります。直径1.5cm~2cmほどの陶製の球丸である陶丸もつくられていました。これは武器として用いられたという説もありますが、未だに使用目的は明らかではありません。



浜井場3号窯出土 水注・四耳壺・陶丸

4. 大窯

16世紀代に「大窯」とよばれる窯で焼かれたやきもので、灰釉や鉄釉をかけた製品が多くつくられました。



志野柳鳥文向付

大窯はそれまでの窖窯とは異なり、地上式の窯で、切り立った谷の頂上付近に築られました。焚口を縮めて燃焼室を左右に広げ、炎が立ち上がる壁を設け、小分炎柱を作ることで火力を増すことに成功しました。

製品は16世紀半ばに流行した茶の湯に用いられた茶陶のほか、小皿、すり鉢、徳利などの生活雑器、仏花器や香炉などもつくられました。大窯では釉薬が多彩で、灰釉、鉄釉以外に銅緑釉や瀬戸黒、長石釉(志野)、黄瀬戸などがあり、また鉄釉で絵付けされた志野の製品も出現します。

多治見市内で確認されている大窯は、白天目茶碗が出土した小名田町の小名田窯下窯、瀬戸黒茶碗が生産された尼ヶ根窯の他、東町の生田7号窯、滝呂日影窯、笠原町の妙土窯などが挙げられます。

・小名田窯下古窯跡群

小名田窯下古窯跡群は小名田町3丁目にあり、16世紀の大窯4基と江戸時代の連房式登り窯2基、大窯の作業場が発見されました。そのうち1号窯は16世紀初頭に操業し、美濃大窯編年I期の指標となる重要な窯です。また、ほぼ同時期に操業した6号窯からは現存数が少ない白天目茶碗を焼成したことが確認されており、発掘調査がされた美濃大窯の中では最古のものと考えられています。戦国時代から江戸時代中期までの窯業史解明において、重要な役割を果たす窯跡群であると考えられており、平成10年7月31日に多治見市史跡に指定されました。



小名田窯下窯出土 白天目茶碗

・妙土窯

妙土窯は、笠原町向島にある大窯の窯跡で、南に面した丘陵斜面を彫り込んで岩盤上に築かれています。昭和49年(1974年)に美濃の大窯では初めて学術調査が行われました。天井部分が崩壊しているものの、分炎柱、床面、両側壁などよく残しており、付属作業場も認められました。操業年代は16世紀前半と推定され、出土遺物は碗類、皿類、鉄釉四耳壺、瓶類、すり鉢、甕など多種にわたっています。また銅緑釉小皿の陶片も出土しました。妙土窯は昭和55年3月25日に岐阜県史跡に指定されました。



妙土窯出土品

5. 緑釉陶器

緑釉陶器は日本では飛鳥時代の後半から作られ、平安時代には祭祀用の器や、上流階級の愛好品としてもつくられた高級陶器でした。無釉の素地を焼成(1次焼成)した後、銅を発色材とした鉛釉を施して緑色に発色させる低火度焼成(2次焼成)の2工程があります。北丘15号窯からは緑釉陶器の素地が多く出土しています。

また、住吉16号窯は10世紀代に使われたと考えられる岐阜県内初の緑釉陶器専用窯です。灰釉陶器に緑釉を施した試し焼きがほとんどですが、鮮やかな緑釉の発色が見られます。



住吉3・6号窯出土灰釉陶器 碗・皿

6. 陶硯

陶硯は陶製の硯のことで、古代からつくられています。現在、多治見市で出土している陶硯は、一番古いもので10世紀(平安時代)につくられたものがあります。この時代の灰釉陶器の窯からは、その形が漢字の風の字に似た風字硯が多くつくられていました。鎌倉時代以降になると、全国的に陶硯はあまりつくられなくなり、石でつくられた石硯が主流となりますが、多治見市を含む東濃地域では引き続き陶硯がつくられました。この時代の山茶碗の窯では、長方形の硯である長方硯が多くつくられています。中には、墨を摺る陸部と墨を溜める海部が仕切られており、両者の間に穴があいていてつながっているものもあります(写真の矢印)。このような硯は東濃地域では初めての資料です。



細峰3号窯出土 陶硯

陶硯は、文字の使用を裏付ける重要な資料であり、窯業地である多治見を代表する資料の一つです。

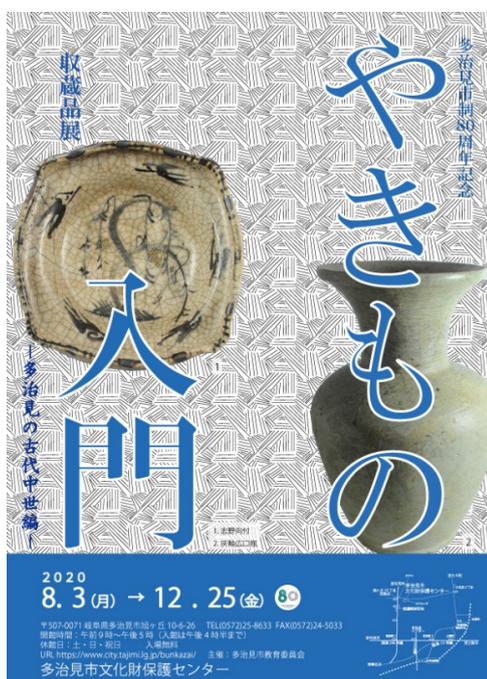
7. ヘラ書きのあるやきもの

市内の窯跡から出土したやきものに、焼成前にヘラや釘のような鋭利なもので図や文字を書いたものがあります。これは陶工が書いたもので様々なヘラ書きが見られます。中でも「大」と書かれた灰釉陶器がいくつか出土していますが、多治見市の土岐川以北が伊勢神宮領の池田御厨で、神宮に収める供物としてのやきものに伊勢神宮を表す「大」が付けられたとの見方もあります。また、北丘19号窯出土の山茶碗に書かれた文字は、他のヘラ書き文字と比べ鋭い筆跡で、国文学者の北大路建氏は「当時の工人が書き手とは考えられない。むしろ、ここを訪れた者(武士・僧侶・公家)の手によるものであろう」としています(多治見市教育委員会編『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会、1981年、104頁参照)。



北丘19号窯出土山茶碗 碗

※写真の資料はすべて多治見市教育委員会所蔵



【展覧会情報】

収蔵品展: 「やきもの入門—多治見の古代中世編—」

会 期: 8月3日(月)～12月25日(金)

会 場: 多治見市文化財保護センター展示室

多治見市旭ヶ丘 10-6-26

TEL:0572-25-8633

開館時間: 9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日: 土・日・祝日

入場料 入場料無料